

あしふ

77 号 4 1970



もくじ

「家庭アンケート」を読んで	十日市啓志	4
アンケート追稿		8
家庭教育について(二)	矢崎 好子	10
はじめての子供のこと	草刈土岐子	13
亀山さんへの手紙	行俊 敏子	15
似ている人	吉田てる子	19
秋の手紙	松本 恵子	19
川	関 かおる	21
笑い話の中の教訓	三矢 久子	29
新入会員になって	永堀のり子	22
花の種をまきました	高橋 紀子	23
詩「宝石」	春野 董	9
童話「てのないおにんぎょう」	杉本	24
俳句三題	高木 米子	25
詩「星の宮殿」	春野 董	25
随筆「夏の夜空」	重川 雄	26
編集後記		30
表紙絵	斉藤るり子	表

「家庭アンケート」を読んで

川西市 十日市啓志

男・夫の立場からの家庭論を書き続ける前に、75号と76号の両方に集約された「家庭についてのアンケート」集計の仕事がまわってきました。

そこで、23人から寄せられたアンケートをまとめながら僕なりの感想を書きつづつていきたいと思っています。

まず回答を寄せた人たちの年齢・結婚経験・子供の数・家族構成についてですが、それは表①—aから①—dまでに示されている通りです。

年齢30代、結婚経験七～八年、子供は二人以下の核家族。

この表が示している平均的「わいふ」像はこういうえそうです。

①—a 回答者の年齢構成

20代	2人
30代	19人
40代	1人
不明	1人

計23人

①—b 回答者の結婚年数

6年～10年	14人
11年～15年	8人
16年～20年	0人
21年～25年	1人

①—c 回答者の子供の数

子供なし	1人
1人	8人
2人	9人
3人	4人
4人	1人

①—d 回答者の家族構成

夫婦のみ	1
3人	7
4人	7
5人	3
6人	4
答なし	1

ちなみに23人の性別は22人までが女性で、そのうち職業を持っている妻が8人、残りが職業を持たない主婦です。結婚年数については7年が5人で最も多く、6年、10年、12年が各3人、8年、11年が各2人といったところで、最低が6年、最長が22年です。

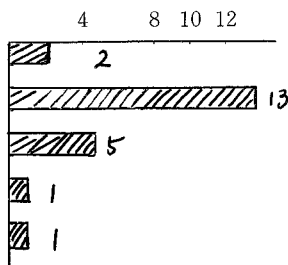
なお年齢不明の1人は、結婚経験年数については22年と答えていますので40代とみてよいでしょう。

理想の家族構成とは？という質問に対する答は表②にある通りですが、予想した通りとはいえず圧倒的多数が夫婦と子供だけの核家族と答えています。戦前の家族制度が否定され、夫婦単位の家族が主流を占めているという現状の反映でもあるでしょうし、また年とった老人を引きとるという住宅事情の影響もあるでしょう。

ところで、問題は問3と問4です。つまり結婚、出産を今までに後悔したことがあるかというところです。結果は表③、④の通り。

② 理想の家族構成

- a. 夫婦のみ
b. 子供1~3人
c. 子供4人以上
a又はc
その他



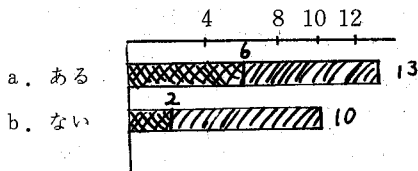
「自分の事ばかり考えることが出きず、自由が束ばくされるから」(回答その二)「時間的に制約を受けた時、行動半径が小さくなった時」(回答その一)「主人の転勤のため、大切なわたしの場職をすてなければならなくなった時、結婚している自分が、「つま」である自分が悲しくて、たくさん涙をなしました」(回答その四)

「夫の転勤によって退職した時。姑とのトラブルが起きた時。自分自身やりたいと思う

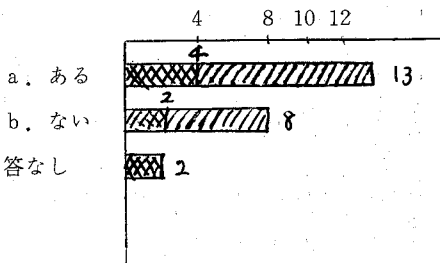
この設問は今度のアンケートの大きな眼目の一つでした。おそらく回答者の殆どは恋愛結婚といえる、つまり自分の意志で結婚家庭を選びとった人たちであろう。積極的に家庭を選びながらも後悔家庭に対する疑問を感じたことのある人がどの程度あるものか、そしてその原因・端緒はどういうことから生じているのかを知るためのものでした。

全体の六割にあたる人が結婚を後悔したことがあり、出産を悔いたことがあるわけですが、その多くの場合、自分の自由を

③ 結婚を後悔したことの有無



④ 子供を産んだ事を後悔したことの有無



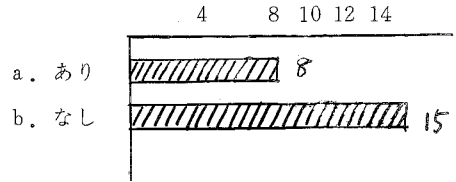
ことが全然できなくてイライラする時」(回答その五)「お互いに束縛しあい、妥協していかざるを得ない時」(回答その十九)

以上の例でわかるように「相手をまちがえたのではないかと思つた時」と答えた回答(その十八)よりも結婚ということによって個人としての自由に制約を受けた時に悔いを感じたという例が圧倒的に多くなっています。

このことは表⑦の妻の職業の有無と対照しながら見るといっそうはつきりしてきます。表⑦で明らかのように23人のうち職業を持つている妻は8人ですが、そのうちの6人までがなんらかの意味で後悔したことがあると答えています。

(表③、④で濃い斜線の部分が職業を持った妻の回答数です)

⑦ 妻の職業の有無



もつとも厳密に考えますと「後悔したことがあるか」という設問の受け取り方に多少の差がみられますので絶対視はできないかも知れません。回答（その十二）にあるように「後悔したことはない」という方に答えていても後の説明をみると断定的ではありませんし、本当の意味で結婚を後悔している人は回答を寄せること自体しないかも知れませんから。

それから設問の上での弱点は結婚の端緒が恋愛結婚かどうかをはっきりと聞いておかなかったことです。「わいふ」の性格上殆どがそうであろうとの推定はできますが、断定はできないため積極的に結婚を選びながら後悔し疑問を持った人がどの程度いるのかははっきりしないからです。

はつきりしていることは「人間としての自由が束縛されて」結婚し家庭に疑問を投げかけたことがあつてもを投げかけたことがあつても現在の家庭の保持に疑いを持っている人はいないということです。

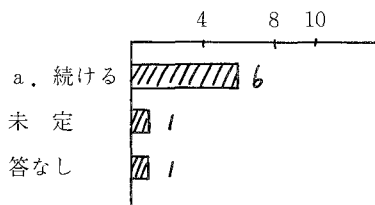
僕自身に興味があつたのは共働きの妻の方がしんどさを感じることは多い（8人のうち6人までが結婚を後悔したことがある）と答えており、半数が子供を生んだことで悩んだことがある

と答えているのに、これまた大部分の人が共働きをやめるつもりはないと答え（表⑦の1）同時に理想的な家庭を営むためには共働きが必要だと考えている点です。

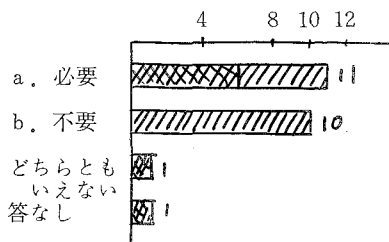
僕自身の体験に即してみても現在の共働きはかなりシンドイ条件に取り囲まれている例が多い。とくに子供ができた場合の負担は急速に倍加します。僕の囲りにも何組かの共働き夫婦がいるのでよくわかるわけです。決して女性の側だけがシンドイわけではない。家事の直接的負担は女性にかかる例が一般的には多いかもしれないが男性側には質の違うシンドさがあるので。

具体例をひとつ。僕の知り合いの共働き夫婦の場合ですが。年代は僕と同じ30代、結婚経験七、八年、子供2人。団地の3DK住い。夫婦共に同じ職場にいたため結婚後数年たつて子供ができるとう夫の方に圧力がかった。「もういい加減やめさせたらどうだ」という調子で。妻の方にはなんにも云わない。職制が夫をよび出しては「勧告」するのです。「君の将来もあることだし、ひとつ奥さんは家庭に入ってもらつて君も思う存分仕事に打ちこめる条件をつくつたらどうかね」という工合です。初めは自分一人の胸におさめて頑ばっていた夫の方もあまりしつこいので妻に圧力の有ることを打ち明けた次第ですが、そのことから職制の干渉が明らかになり組合でも問題としたため表面的には収まったのです。ところがしばらくたって定期異動の季節になると夫の方だけ希望の職種からはずされて関係のない職場へやられたわけです。妻の方はそのままです。社内の異動ですから別居を強いるものではない。男の立場からいえば定年ま

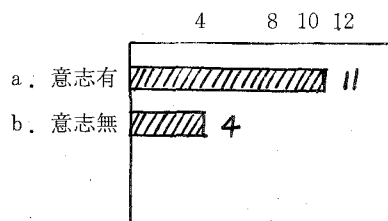
⑦—1 共働きは続けるか



⑤ 共働きの必要性

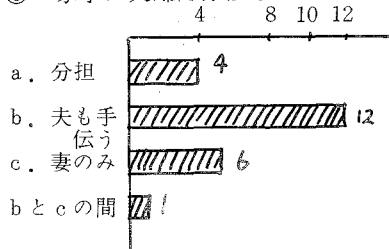


⑦—2 共働きの意志の有無



(濃い斜線の部分は職を持った妻の回答)

⑥ 家事は夫婦で分担しているか



学生時代同級生四人で二階の二部屋を借りきって共同自炊の生活を2年近くやっていたことがありました。全く平等の立場で持ち回りの炊事当番を決めたのですが、長時間たうちに料理を「創る」ことの好きなやつが炊事を引き受けることが多くなり、会計担当、父親的存在などの役割りの分担がはつきりするようになりました。全く同じ理由で女性にも個性の差はあるわけで

僕自身は一律に共働きが必要だとは思いません。個性の差があるからともいえるし、これは夫婦が決めることだと思うからです。

76号にもふれましたが、われ／＼クラスの庶民は男女を問わず被害者であり、その意識をもってそれ／＼の立場で受ける社会的制約をはねのけなければこのシンドさを男性女性共に本質的に解決することはできないと思うのです。

という気があるし、同期のものにどん／＼追い抜かれるのも、わり切っているとはいえあまり愉快なものではありませんから徹底的にモメることもできるだけ控えるという気持があるわけです。妻の方は希望通りの仕事に従事し、夫は入社の時考うもしなかった仕事をさされ、2人の子供の保育所への送り迎えをやり、妻が休日出勤の時は当然のことながら食事の用意からオムツの世話までやり続けているわけです。口先だけの僕にはとてもできないと思われる悪条件に耐えながらの共働きです。

おそらくアンケートに答えた8人の共働きの人がこれと同質のシンドさを受けながらも、共働きは必要だと答え、共働きを続けていくつもりだと思っているのでしょう。僕が興味を持ったというのはこの点なのです。

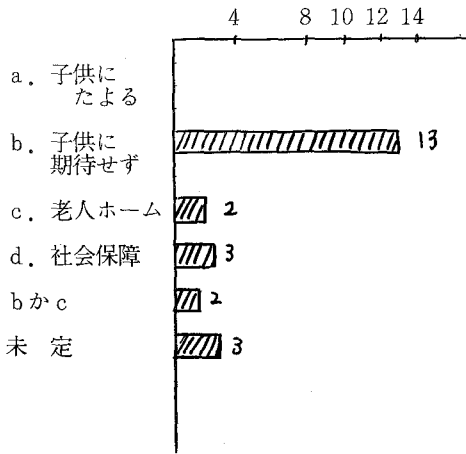
アンケート追稿

回答（その二十四）

すから料理や育児に打ち込む人がいたっていいこうにかまわな
いと思うわけです。ただ問題なのは経済的に自立している方が
どうしてもいばるようになるというやっかいな傾向が人間にあ
るといことです。女性が社会的労働を引き受けている社会で
は女性がいはっているわけですから。この傾向とどう「戦う」
かこれがわれわれの課題といえそうです。

個人の体験に即したまとめ方になって恐縮ですが以上が僕の
アンケートを読んだ感想です。そして最後に僕の家庭の今後
の問題はカミさんが「自立」を宣して職業を選んだ時、僕がど
のような態度をとるかです。かなりの興味を持ってその「時」
の来るのを待っています。

⑧ 老後について



回答（その二十五）

- 1 44才 結婚23年 家族6人
- 2 c 夫婦と子供四人以上
- 3 b 結婚を後悔したことがない。
- 4 よき人にめぐり合えたから。こどく同志で一人前になった感。
- 5 b 子供を生んで後悔した事はない
- 6 私の場合、兄弟が少なかったため。
- 7 a 夫婦の共働きが必要
- 8 主人にばかりふたんをかけたくない。共に働き、共にいた
- 9 7の② 情況が許せば今後共働きをするつもり。
- 10 (自分自身の為になる仕事であれば)
- 11 b 子供に期待せず老後の為今から準備する。
- 12 家庭とは生活の基盤となり、人間形成の場所だと思ふ。
- 13 私にとっても一番手近かな自分を試す場所だと思っている。
- 14 7 b もっていない。
- 15 6 c 外での仕事は夫、家事は妻とはつきりしている。
- 16 7 b もっていない。
- 17 5 b 共働きが必要と思わない。
- 18 3 b 結婚を後悔したことがない。
- 19 2 b 夫婦と子供一三人
- 20 1 39才 結婚十年目 夫婦だけ

わり、はげましあい、収入もふえればこの上なし。

6 b とりきめはないが手が空いていれば夫も手伝う。

7 a 妻も職業をもっている。

7の① a たとえ困難があっても仕事を続けるつもり。

8 b 子供に期待せず今から準備をしていく

9 家庭とは、字のごとく、家があつて庭があつて、小さいけれど幸福そうな感じがします。私はあまりくよくよしな性質なので、どんなつらい時でもほえみを忘れないように心がけているつもり。疲れておそく帰ってきた主人に對して、あまりゴチャ／＼いうのも嫌いで、そつと座っているタイプです。

主人が色々と会社のことをいっても、フン／＼ときいてるし、といってムツツリやでもない。時たまゴーゴーもおどれば、歌を唱ったりします。三味線もひきますし、ドカんと、バクダンもおとします。

まあ、つまり家庭とは、いこいの場ですね。

詩 宝 石

春 野 董

私は宝石が嫌いだ
つんとすました女の首に
冷たく光っている

宝石

妻よ

お前は私の宝石
黒曜石の眸から
真珠の涙をみたとき
私はこわれる程
抱きしめたかった

そつと

私の手のひらの中で
お前はふるえていた
私の暖い胸の小箱で
永遠に眠れや

家庭教育について(二)

——告白的教育論——

吹田市 矢崎 好子

白状しますと、私は今でも娘ととにかく精神的な接触をしなければならぬとき、日常よくあることでは真剣に叱ろうとか、なにか生活の上でのとりきめをしようとか、娘のほうから読んだ本の話をする、ともだにとけんかした、遊んだという話をするという場合、まず一瞬、いやあな感じがするのです。話の内容によつてはそれが持続発展して、起らなくてもいい摩擦を起すこともあります。私にはなんとなく娘と深い関わりあいを持つのを、いやがるというか、恐れるというか、忌避する傾向があるのです。こいつと関わったらとんでもない目にあうぞ、という条件反射なので、娘との最初の接触で私の心が負った火傷が原因だと思ひます。

東京で暮しているうちは、家族もいれば友だちもいるから、まだ娘も私も逃げ場がありました。

関西へ来て、文化住宅というヘンな名前（東京では皆アパートです）の代用住宅へ入り、家族三人きりになると、今まで逃げ逃げてごまかしてきたことの誤まりがはつきりしました。私には娘を可愛いという気持がちつともなくて、ほんとのことをいえば側にいたくないのです。しかし娘をうちのすぐ近所にあつた武庫川に放うりこむとか、捨てて東京へ逃げ帰ってし

まうとかいう、強烈非常なる手段に訴えなかったのは、勇気がなかったのか、案外正常だったのか、義務感が強かったためか、今でもわれながら分りません。当時の実感としては、きちがいになれないのが辛いという状態でした。

いったい二才半の幼児を相手に、なにをそんなに腹ばかり立てたのかというと、まず一日中、無数の判断をせまられ、その判断の基準がつかめなかったことです。

朝、私たちが起きる七時に起こすべきか、それとも夫婦でゆつくり朝食をするために、寝かしておくべきか。ねかしておきたいが、おこして一しよに食べさせないと、なにか悪いことが起るのじゃないだろうか。といったところから始まつて、起きてくると娘の一举手一投足に、これを許すべきか許すべからざるか、叱ろうか叱るまいか、抱くか抱かないか、どうしよう、こうしようと不安でたまらないわけです。知人に、子どもについてある理想像を持つていて、現実の子どもがそれと合わない点をいちいち問題にし、ノイローゼ気味だった母親がいましたが、私のはその理想像をまったく欠くところに問題があつたので、そのかわり「なにか将来悪いこと（子ども本人にではなく、私にとつて）がおこりはしないか」という強迫観念があるわけです。こんな基準、こんなものさしが誤まつていることは重や分つていますが、どうすることもできません。

育児書とか幼児教育の指導書はたくさんあります。しかし私はこの時、すでにこの種の書物を信用しなくなっていました。最初、ほかにとりつき場もないままに、「暮しの手帖」推せん、緒方安雄著「はじめの赤ちゃん」と、私が妊娠したとた

んに主人が買ってきた松田道雄著「私は赤ちゃん」の二冊にたよったわけですが、どうもこの本は二冊とも、著者の目的とはこと違い、私をたいへん苦しめたと思います。

まず妊娠中に「私は赤ちゃん」を読んだわけですが、この本は私に育児はそうむつかしいものではない、自然に、落ちついてやれば楽しいものであるという、予断を与えたと思うのです。

作中登場する母親は、かなり余裕をもって、あれこれ心配しながらも子どもをかわいがって暮しており、子どもが生まれたために、そう大きな変化が心理的に生じたようにはみえませんが、私もたぶんこんなふうだろうという気になり、安心していたわけです。ここには産後のあの骨身にこたえる疲労や、精神の不安定、育児が重労働であること、とんだものをしよい込んだという驚がくや絶望はカケラもありません。この明るいふん

気の本の中の母子と、悪夢のような私たち母子の数ヶ月とはあまりにもへだたっていました。はたしてどちらが現代の現実かのちのち結着をつけようじゃないか、といった挑戦的な気分にもなつたし、お医者さんでも男は男で、やっぱり分つちやいないんだと不信用にもなりました。この本を読んでいたばかりに私は産後と育児に対して十分な覚悟を欠いたのです。それがつまづきの第一歩であつたことは確かです。

もう一冊のほうは、これはもうしようがないんで、暮しの手帖はまえがきだけ読んで推せんしたんじゃないかと思うほどです。まえがきはたしかに、なによりも赤ちゃんをかわいがつてやつて下さいとか、こまかいことにこだわるなといったことが書いてありますが、中身の調乳法、離乳法となればなかなかそ

んなものじゃありません。離乳第一回にパンがゆを一さじ、二回目二さじだなんて、一さじの離乳食が作れるものではない。パンがゆならまだしも、野菜のうらごし、果汁、スूपとか、母親が本気になって実行しようとしたら、とうていふつうの精神状態ではいられなくなるようなことが書いてあります。さすがの私も、離乳の段階になったときには、浩宮様の待医としてはこれでけっこうだろうが、われわれ庶民の育児には不適當な本であるの見切りをつけ、古い暮しの手帖に紹介されていた、「ありあわせ離乳法」を使って、これはなかなかよかつたと思います。しかし最初はまじめに引っかけかけていました。

ところがある日、隣家に共産党員が住んでいて、私はなにかの用で行つてそのえんがわにすわり、「アカハタ」が置いてあるのを拾いよみしたところ、「育児書には三種類ある。一は小児科学から出たもの、二は精神分析から出たもの、三は社会主義教育論から出たものだ」といったことが書いてあるではありませんか。あつ、そうかというわけで、その瞬間に私は今まで縛られていた育児書の呪術から解放された思いでした。緒方氏のは小児科学から出たものにまちがいないし、三派あるならその一派が絶対であるとはいわれない。要するにまだ結論が出ていないし、またこれは出ようもない問題なんだとはじめて気がついたのです。

こういうわけで、私は逆瀬川時代、育児書は参考にとどめ、とにかく主體的な判断をしようといふ努力を続けていたのですが、この主體的な判断というのがまたたいへんです。まず自分にとって子どもとはなにか。自分と子どもとをどう

いう関係におくべきか。というところから堀つくり返しはじめると、社会制度の問題が出てくる。法律の問題が出てくる。一朝一夕には解決がつかない。その上、前述したように子どもと私とは心理的には敵対関係になってしまっているの、これをこのままにはさし置けないが、どうしたらよからうか。敵対関係がベースになっていては、どんなよい構想をのせてもだめである。どういう手掛りからか、改善しなくてはならない。顔を突き合わせて緊張関係にあるのがいけないのだから、むしろ私が離れるべきだ、保育園へ預けて、働きに出してしまおうかと考え、仁川にある保育園を見に行ったこともありました。しかし出たら最後、子どもの存在は私の心の中で日々稀薄になってしまっているのではない。ただもう邪魔なしろものでしかなく、つてしまっているのではない。たまたま恐れが私を引き留めたのです。しかたなく母子はくつついて暮していました。このころから娘にはそろそろ、母親のまちがった取り扱いの影響があらわれはじめ、予想どおり私にとつての「なにか悪いこと」が起つてきました。

うちにいれば私に怒鳴られるか暴力をふるわれるか、ろくなことはないで、彼女が最初に発した言葉は「パンぶたれること」いやあね！」であつたくらいですから、早くから外にとび出して遊びたがりました。放置できれば気楽ですが、交通事情があるの、引きとめるか、ついて歩くかどっちかをえらばなければなりません。子どもが遊ぶのを、側に突つたつてみていたところでおもしろくもなし、本を持っていつても夏はあつく冬は寒く、逆瀬川ではよく近所の神社や武庫川の川原へいきまし

たが、蚊に喰われてよまりました。

なんとという詰らぬ目に逢うのだろう！ 私はあることをするために生まれてきたのかしら。と思いはじめると、めんめんと子どもの存在のマイナス面が数え上げられてくる。娘は一目散に楽しいことにむかつて突進し、また非常に精神的エネルギーのある子なので、引きとめられれば泣き叫び、ついて来られればうるさいのでいやがり、とうとう年上の友達多数を得て、私から脱出しおおせました。そして日々に放浪癖がつき、代用住宅のことですから、他の会社の人たちもいろいろ入っている。そこへ戸別訪問をやつて、数十軒からお菓子をもらい歩くありさまとなりました。私がおやつ時間をきめてもどうにもならない。食事どきに行方不明になり、ひとのうちで食べてきてしまう。

そうした行為をいくら叱つてもだめなのです。愛を欠いたしつけは無効であり、子どもは信頼しない親のいうことはきかないものだ。それがよく分りながら、私はただ怒鳴つたりたいたたりするばかりで、心を娘に近づける術がないのでした。

はじめての子供のこと

宝塚市 草刈土岐子

矢崎さんは育児に関する疑問から出発して、家庭の持つ意味を考え、そこから現在の自分の生き方をひき出されました。それに比べて、私は何を学んだのかと反省しています。そのことについては今後考えて行きたいと思いますが、育児がスムーズに行かなかった、ぶざまな母親は自分だけじゃないと安心して、はじめての子供のことを書いてみる気になりました。

育児と教育のことは私たちの井戸端会議で最言、最大のテーマです。会議の場所は子供を遊ばせている所です。よち／＼子供があるき出すと、運動と日光浴をかねて、毎日一―三時間戸外で子供につきあわねばなりません。最初は新聞や本や編み物などを持って出ましたが、適当な木陰もなく、目がいたくなるのであきらめました。それに同じ時間に他所のママも出て来たりしておしゃべりがはじまります。この井戸端会議に私はとても感謝しています、具体的に役に立ったという意味でなく、はじめて、自分の何十分の一の、ちよっとおさえれば死んでしまいうような、か細い生命をゆだねられて、大げさに言えば、責任感と緊張で青ざめている私の気持をほぐしてくれたからです。それに得た知識もいいなと思えばやってみる、変だなと思えばやらないでいい、これは育児書という本の場合と同じで、選択できるのもうれしかったです。

と言うのは子供をうむと最初は助けがあるので、私も親元で出産しました。とても助けていただいて感謝していますが、その二ヶ月間で心身共にくた／＼になったのも事実です。当時は人工栄養がはやっていて、出るお乳までわざ／＼美容上ストップさせる人がいた為でしょうか、どこの育児ノートも母乳札賛の記事ばかりでした。母乳ならほしがるとき、ほしがるとささいいとも簡単に書いてあるので、両親はすぐそれを言うのです。昔の育児と同じだというせいもあったのでしょうか。それで、乳房をくわえては吐き、のんでは下痢をし、体重のふえも思わしくなく、朝から晩までギャーギャー悲鳴に近い声をあげて泣いてばかりいる長女を家中で抱き、抱いてなきやまない時は頬をつついて唇をあげたら「ホラお乳をほしがってる」と渡されます。一時間近くつつけて乳房をくわえさせられたり、前の授乳から二十分もたつてないのに又あげなさいという事の繰り返しでした。日に十何回する下痢と、しょっちゅう吐くためによごれる物のあとかたづけと授乳だけの生活でした。私はトイレに立つ時間も顔を洗う時間ありませんでした。他の家事全部と育児のだったこの部分のほとんどは両親にもらっていたのです。

とにかく彼女の泣き声はものすごいものでした。そのたびに下痢の出る前でお腹がいたいのだ、お腹をさすってやれ、胃がもたれるのだ、立てて抱いてやれ、鼻がつまって息が苦しいのだ。鼻汁を吸いとってやれ、頬をつつくと口をあけるから、お乳が欲しいのだ、よく吐くからお腹がすいているんだ、のましてやれ等々の指示があります。両親は十人近い子供を育てたべ

テラン。私は子供ができるまでに二冊ほど育児書をよんだだけ、末っ子だったし、小さな子供のことは全然知らないのですから、出される指示にさからうすべもなく、今考えても気が狂いそうになるような生活をしていました。

一ヶ月たった頃、ふとんをかぶせたら子供は死ぬるけど、私はどうしたら死ぬるかしらとぼんやりした頭で考えている自分に気づいた事も幾度かありました。その頃から赤ん坊がどんなにき叫んでいても私が声をかけると一瞬なきやんでにつきり笑うようになりました。その笑顔をみるたびに正気にかえったように思います。

もう一つ私を救ってくれたのは子供が斜頸だった事です。その為一年半以上、毎日々々病院通いをしたのですが、その間子供と私は乳房から解放され、なお且つ同じような年頃の、同じような病気を持つ母親同志の井戸端会議に出席する権利が与えられたわけです。そこで得る知識は取捨選択の自由がありました。家で子供の前で両親から与えられる知恵は現実にくしくいて、経験のない私の場合ありがたい事も多かったのですが、反対する根拠がない時は、私が実行しなければならぬ強制力を持つていて、拒否する自由のないものでした。

子供の体重のふえが思わしくないこと、下痢と嘔吐が続くことをうったえたと医者さんは薬をくれましたが、それによって回数が増えたり、よくなったりせず、薬のエッセンスのはいったお乳をはくので、洗濯がむずかしくなるだけでした。

私を悩ました子供の下痢と嘔吐と泣き声のうち、泣き声は三ヶ月目にはいる少し前、団地の自宅へ帰ってその日からなくな

りました。子供を送って来てくれたおばあちゃんを送り出したとたんに悲鳴がはじまったので、すぐ子供の所へ行ったら、山ほどたまっている洗濯ができなくなると思つて、そつと風呂場へ入り、洗濯機をまわしたのです。洗濯をすませて行つてみたら、すやすやねむっていました。そしてそれ以後悲鳴は全くなり、ねむい声、お腹がすいた声、だっこしてほしい声などのあることがわかりました。それまで家中、大人四人がかりで育てていたのが、その日から私一人でしなければならぬのかと思うと心細くて、玄関を出て行くおばあちゃんのとを追っかけたくなるような気持だったのです。

下痢と嘔吐の方はしばらく続きましたが回数は半分以下にへりました。理由は子供がよくねむるので、四時間〜五時間おきにしかお乳を与えなかったからだと思ひます。あいかわらず飲む量は少なく乳房はいつも一杯でしたし、体重のふえもあいかわらず少なかったのですが、下痢と嘔吐は穀粉を与え出したらびたりとまりました。最近になつてあらうちの子はこれだったんだと思ひあたり、おそすぎる育児の知恵に苦笑しています。あるお乳の広告に「母乳や牛乳など動物性のお乳が体にあわない赤ん坊にどうぞ」というのがあつたのです。彼女はそれのせいでしょか、嘔吐がなくなる頃からひどいしつしんがずっとできていて、食事の中でお乳の占めるパーセンテージがさがるに従つてしつしんも軽くなつて来ました。蛋白質食品に対する彼女の好みはとてもはっきりしていて、よろこんでたべてくれるものという、豆腐、納豆、ピーナツ、なつめ、黒豆などです。たまたま育てにくい子であつたせいもあるでしょうが、はじ

初めての育児の経験は私にとってもひどいものでした。それにしても団地という所はいいなと思います。若いママが多いです。井戸端会議の条件がととのつています。赤ん坊や小さい子が多いので、育てやすい子供用品をふんだんに売っています。親元にいた時、あるいていける範圍の店四軒をまわっておしめカバーを買に行ったことがあります。どの店も巻きおしめの次は八ヶ月用が一番小さいのだと言われ、どんなにゴムをしぼってもやせっぽちのお尻からぬけて困りました。それにほとんどのお客さんが若いママである団地のそばの薬局のおばさんは育児のコーチです。そこで未熟児用の粉乳を教えられてのませてみたら、吐かずにのんでくれました。最高でも八十℃ほどでした。

二人目の男の子の場合、ねむりが浅いのか、ねむりの波がはげしいのか、二才すぎた今でも二―三時間以上続けてねむってくれる夜は数える程しかありません。でも彼はお乳がすきで、授乳の度に乳房はからっぽになりました。それで気が楽になるのでしょうか。どんなに小さくても独立した人間で、自分でいっしょうけんめい生きようという積極性をもった生き物なんだ。ママはそれを助けていけばいいんだという気持で最初から心安らかに育てています。それに手伝ってもらって完全にするより私は産後なんだからと考えて、家事は最低限しかせず、放っておく方が楽だという事もわかりました。これが経験というもののなかでしようか。

亀山さんへの手紙

大阪 行 俊 敏 子

お元気でいらつしやいますか。

ぬかみそ教室「教科書のなかみがかわっている」三月号で筆をおかれたこと、とても残念に思います。家永教科書裁判を支援する会の事務局の仕事を手伝っている私に、去年の春、知人が「教科書のこと書いてありますよ」と二冊のわいふをもつてきて下さったのが、亀山さんとの最初の出会いでした。それ以来、わいふがくるとまっさきに読み、感心し、私も何か書かねば、今月こそはと思いつつも一ヶ月づつすぐたつてしまします。先日六十三号の「オカーチャンノオシゴト」を読んでいます。何もかも一生懸命生きていらつしやる人だなと思いがち、私も又、朝の忙しいひととき、子供のことを思い、家を出て行った頃を思い出し、その頃に書いた繰り方を読んで頂きたいと思いました。そして今の感点と――。

これはずっと家庭にいた私が子供に手がからなくなつた日、人形劇団へ人形つくりに行きその友の会のニュース用に書いたもののなのですか……。

黒板

私が人形劇団に人形の衣裳のお針子を志願して週に二回家を留守にすることになった時、気になるのは二人の子供のことだ

った。中学二年生のミツコと小学四年生のヒロシは、「だいじょぶ」と言ってくれるものの、あの口笛が近づいてきて「お母ちゃん、ただいま」という時間がしきりに思われるのだった。そして私はせめて子供に何か書いて出かけようと思いつき古い黒板を出してきた。

黒板。それは子供達がもっと小さかった頃、らくがき用に買ったもので六〇糎×九〇糎というその大ききの故と、その頃書きあきらめたまゝ、タンスの後で埃だらけになっていたのだった。そして黒板はこの小さな家の中心部と考える一番目につく壁面に、大黒柱ならぬ大黒板としてつり下げられたのである。「おかえりなさい。おやつおあがり。ひろちゃん自転車に乗る時は気をつけて。けんかしないで。みっちゃん五時半になったらごはんたのみます。」こんな思いつくまゝの文字がならば、夏となれば川へ行ったらグメ、冬となれば火の用心という字が最後につく。朝グズグズしている中にバスの時間になって何も書かないで走り出した日は、忘れものをしたみたいにな気になる。家へ帰るとほっとして朝の忙しい字をゆつくりと消すのであったが、そのうちに黒板そのものもだん／＼と忙しくなってきたのである。

ごく身近かな所に書くものがあり、それに書いてもすぐ消えるという気安さがあるから誰でもちよつといたづら書きがしたくなってくる。ヒロシは学校向きの面を書くのは嫌いであったが、この黒板には彼の愛読のマンガ風の面をいつも書いていた。或る日は大きな口を開けた猫が書かれ、その口へ三米位離れた所から粘土のダンゴを「エイッ／＼」とはり込むのである。又、

彼のミチュエーリン的空想動物園では、バリネズミ、ブタワニ、地球リス、メスズなどと奇妙な動物を発明発見し、黒板一ぱいにこれらの珍種がならべられた。「セロ弾きのゴーシュ」公演の前後はタヌキの画ばかり書き、それが腹鼓み大会ともなれば私もつられて見物席の動物を書く。そんな画を書くのは私も始めてのことであり、やがて親子合作の迷作が出来上ると消すのが惜しくなってくる。ヒロシは「さあ、みんな、ハワイへ行こう」と黒板ふきで波が押しよせてくるように消してしまふのであった。

黒板の使い道はもっとあった。去年の秋、ヒロシの学年で図画工作の時間に指人形の作り方があり、週一回づつ三時間ばかりで子供達は各自が自分の人形を作った。その時、私も手伝いに行つたので子供達と仲よくなつた。私の家へ来れば人形がたくさんあると思うのだろうか。それ以来子供達がよく遊びにくるようになった。ぬいぐるみの動物、指人形のあるだけにならべたり、粘土をこねたりして遊び始める。ぬいぐるみの動物はしつぱや手足に毛糸を結びつけられて即席のあやつり人形となる。そんな時黒板は堅からおろされる。二つの部屋のシキリのふすまの一枚がはずされ黒板が立てかけられケコミとなりあやつり人形の背景となる。黒板の裏側では、ヤンチ、タツクン、ムイムイ、ユツキャンなどとニツクネームで呼びあう元気な子供達がテレビの人形劇よろしくいろいろ工夫して遊ぶ。遊びあきれば黒板は皆のまん中におかれ油粘土で山や川を作ったり、画を書いたり始める。この間も蟻の国を書くのだと四人で迷路やアリの倉庫を書いていたが、ワイワイとさわがしい……と思っ

ている中に黒板はまっ白に塗りつぶされていた。アリの国に悪いクモが一匹やってきてけんかになったら、アリが一ぱい集まってきて白くなってしまったのだとのことであった。フウンと呆れたような、感心したような返事をしながら、私はグングンと成長して行く子供達の心を感じた。

❀

この文を書いてから何年になるでしょうか。今ミツコは大学生、ヒロシは高校生になりました。そして私は夫や子供に励まされながら、教科書裁判を支援しています。今、私の目の前にある黒板の上に書かれている文字。二十一日、拡大役員会AM10時—PM8時30分、二十四日地区連ニュース編集会議、二十五日、西宮婦民ク教科書懇談会、わいふ原稿しめきり、二十六日、カンパ要読PM2時30分エーワン集合、二十八・二十九日全国活動者会議 x名参加 今後の運動についての討議。と日程が書かれ、そしてはしの方に、卵四ヶこな、さとう125gバター60gと書いてあるのはお菓子を作るのが好きなヒロシが書いたケーキの分量なのでしょうか（彼は理科の実験的に作る過程を楽しむので時々異様なものが出来上ります）。

とにかく、黒板は今、あの頃と又違った忙しさの中にあります。黒板塗料を買ってきて何度か塗りかえましたが、私の作った赤いタヌキのシツボン（しっぽが黒板ふきになっています。）が共にぶらさがっていて、黒板はまるでこの家が建った時からその場所にあるように落ついてそこにあります。書かれ、消され、書かれ、日に何度かそれを見るいくつかの目。子供の幼ない日、落書き用に買った黒板はひとときたんの後で埃だらけ

になり、やがて日の目を見た時いろいろと使われるようになります。おこがましいかもしれませんがこの黒板は私自身であるかのような気がする時があります。自分が母親であることにウツトリとしていた頃。そしてだんだんと悪くなつていく世の中に、子供を産んだことを重く感じるようになった時、私の目の前には教科書裁判支援という仕事がありました。毎月十二日——それは裁判が提越された六月十二日を思うこと——街角にビラまきに行き、「署名カンパをおねがいします」と道ゆく人に呼びかける恥かしさに、それは本当の恥しさでなく、そう思うことの方が恥かしいことなのです。その時、黒板は又タンスの後ろに入りたがっているとおもいます。平凡な主婦であった私の前に思いがけない道がありました。そして黒板はもっともっと忙しくなっていく事でしょう。

大正の末に生れ、満州事変の頃、小学校入学女学校卒業の前に米英と開戦という軍国主義の時代の中に育ち、神国日本を信じていた私にとって、敗戦の日、一切のものが崩れさつていった恋しさは、教育の恐しさでもあり、又、教科書の恋しさでもありました。

亀山さんは「この訴法は裁判に名をかりた一つのシンボジュムである」という弁護士言葉が胸にあつて、教科書の問題を書いたと述べられていましたが、この裁判は国家権力がどういう人間を必要とし、どういう人間に育てたいか……ということに對し、私達自分自身が人間としてどう生きたいか、そして私達の子供がどんな風に生きてほしいか……ということの一つの対決の場なのではないでしょうか。教科書について争われてい

るこの裁判には、そのような大きな意味があると思うのですが……。今、子供達の使っている教科書は色刷りで明るく無償ですけれど、内容は亀山さんいろいろな書いて下さったように、だんだん変えられつつあり、検定は検閲に等しく、出版のわくのきびしさは国定教科書と変らなくなっています。そうなった時権力側は思いのまゝ、の人間を作ろうということになりますものね。私は、この国のこの時代を生きてゆかねばならないとすれば、少しづつでも明るい未来を願って、労働者も母親も皆が自分の問題としてこの教科書裁判に関心を持ち支援し、大きな国民運動にしていけないものかしらと思います。それが戦前の教育を受け聖戦に協力したことのある私の願いです。

我が家の古い黒板によせて書いているうちに長い手紙になりました。又、日頃思っていることを書きたいと思っています。では又、お元気で。

一九七〇年三月二十三日

わいふの会員の方へ

●いつも何か投稿しようと思いつかなか書き難く、亀山さんの了解を得て手紙という形で書かせてもらいました。これから時々教科書の問題、日々の暮しの中で感じることなど書きたいと思います。

●家永裁判を支援している会——正式には教科書検定訴訟を支援する全国連絡会に入会共に支援しようと思われる方へ趣意申込者、資料など送ります。(年額六〇〇円裁判の進行運動な

どの教科書裁判ニュース及び地区連ニュースを月一回送付、その他)乞ご一報。大観迎。

Tel 06 九〇一、八〇九〇。ゆきとしまで。

●教科書の古いのを頂けませんか。四月から新学期が始まります。もしご不用の小中高校の教科書があれば下さいませんか。近い所ならばもらいに行きます。遠ければ送って頂けないでしうか。有用、有効に使います。

●黒板ノススメ。これはコマースヤル。一家に一枚?少し大さめの黒板を私達は友達に——入学のお祝とか——手製のシッポンをつけて贈り喜ばれました。

●以上、それぞれよろしく。

副島陽子様へ

宝塚市 高橋 紀子

新しく会員となられた副島様の「多々良川」を拝見いたしました。短文ながら心あたたまる思いがいたしました。

見知らぬあなたのお気持が伝わって来るようでございます。

どうぞこれからも度々わいふ誌上でお目にかかれますようにと願っております。

似ている人

高槻市 吉田 てる 子

十日市さんの顔を拝見したのが五周年記念の揚子江という大阪での会場、奥さんと共に出席され其の時から誰かに似て居られると思ったのだがどうしても思い出せないま、一年もすぎ、六周年を迎え仁川団地集会所でにこやかな顔を見せて下さった。或る一点を見つめて話される口振り、眼鏡越しに見える目付、やつと思ひ出した。十日市さんには悪いのだが小学校三年間受持って頂いた先生だったのである。とてもとてもこわい先生その印象しか残らなかった。十日市さんの様に温顔でないけれど、やっぱり似ていらつしやる。当時支那事変始まって間もなく「お国のためにたたかた兵隊さんのおかげです」と歌を口ずさみ何事もお国のため「兵隊さんの事を思へ」といつては何のようしやもなくすぐ手があがりチヨークが教壇からとんで来たり、足げにされたり、机のフタでたたかれたり、男女の差別なくきついしごきのやり方であった。寒い北国であり冬ともなれば田圃も道もわからなくなる程降る雪の中に「宿題をを忘れた」といつて放り出されたり、次から次へと思ひ出されて来る。先日も三十年振りに級会をするからという案内状を頂き私も参加した。十五人程集まった中で私のみはるゝと列車にゆられて出会いたさに故郷へとんだ。皆んな農村婦人らしくたくましく生きる友達、耕うん機も運転するのだという友達もあり、乳牛を拾頭飼育して自家用で乳を処理場へ運搬するのだという働き

振りに只驚くばかり、話はずみ三年間も教えて頂いた恩師を何故招待しなかったのかという声もあったが、大反対をとえたら一員の中に私も交っていた事はかくし得ない。級のポストにらまれた者は皆んな反対だった。こわかった先生の事が話題にのばりいつまでもつきず四時に番茶で乾杯して又会う日を楽しみに、恩師は招待しない事を約して別れたのである。そんなに嫌われた先生に似て居られるという十日市さんにはこんな事書いて失礼と思う。でも世の中には三人似た人があるという事だから許して頂きたい。

秋の手紙

尼崎 松本 恵子

「あ、松本さん？ 北川です。私今度こそお店やめてしまおうと思うのよ」受話器のむこうで、突然そんなことを云うあなたに、正直のところ私はびっくりして、そして、何と受け答えたい、のやら戸迷いました。なぜなら、あなたは春のころ、私にわざわざお電話下さって

「私たちおつきあいやめた方がいいと思うわ。お店でも松本さんの話がでるの、知らない顔してお仕事続けるのがつらいのよ」そうおっしゃった。その用件だけの「わざわざ」でした。私は、何も私のこと隠しておいていただく必要なんかありませんでしたけど、北川さんの方で御都合悪ければ、そういうことにしてもらっても何の差しつかえもないことなのです

「その方がよろしいのでしたら、どうぞ」と御返事したのでした。

あなたは、私といっしょに働いて下さった縫製師、そして、三人のお子さんのおかあさま、私などよりずっとずつと経験豊かな方です。どんなことに對しても決して角を立てるということとはしない、立派な大人だと、私はいつもひそかに尊敬しておりました。でも私は今、正直に云います。私とのこと、つまり、お店を退めてしまった私を心配して、たびたびこの遠い尼崎のアパートまで尋ねて下さったこと、そのことは本当に嬉しく思っています。でも、なぜこれをそんなに隠し続けなければいけないのか、私はかえって、このことをお店のママに話して欲しかった。私のことをよく知っていて頂いてる北川さんの口から、私の立場をほんの少しでも話して欲しかった。それができないほど気の弱い北川さんではないのです。

「いやな問題には立ち入りたくない」あなたはいつかそうおっしゃいました。「洋裁を媒介としてこれからもずーつとお友達でいて欲しい」そうもおっしゃいました。それなら私は、あなたの心の中で友だちとしての位置をしめていたことになりました。それがなぜでしょう、いやな問題、とは。そして、立ち入りたくない、とは。

まあ、それはいい、とします。でも昨日頂いたお電話は何ですか？ あなたは話しているうちに、とうとう本音を吐きました。「近所の人のとなるとあとまでうるさいし、お仕立代も高くはもらえないしね、その点下請けは楽だけど、もうあそこは嫌になった。でもちょっと休むとお小使いが心細くなってきた、

嫌だと思いながらもついつい受けてしまうの。主人は、やれ旅行だ、やれ飲みかただと外ばかりだし、子供たちも中学になると親なんか相手にしてくれないし………淋しいわあ」

高石友也の「主婦のブルース」が頭をかすめて、私は腹を立てる気にもなれませんでした。「私やっばり、松本さんのカツティングがしやすいのよ」あ、それが云いたかったのかもしれないのですね。でも、もういやなのです。きつと、これも内緒で、たとえお店をきっぱりと退めてしまっても北川さんは「内緒で」という一つの決心をして、私のを受けて下さることでしょうから。そりゃあなたは私などよりずっと腕は上。大いに助かります。でも、いやなのです。

お電話頂いた次の日、私たちは梅田でお会いしましたね。あなたは丸く小さな身体にうす紫のスーツ、私はプリントのワンピースでした。別れぎわにあなたのおっしゃった「忙しい時にはいつでも助けに飛んでいくわよ」そのことば。これが私の心の「いや」という気持を決定的にしたのです。

八方美人が友だちをも自然淘汰させるというこの摂理、紫色が雑沓の中に淋しそうでしたけど、ごめんなさい。

川

京都市 関 か お る

京都の市内を南北に流れる川に、鴨川と堀川があります。鴨川の方は「鴨川を美しくする会」が蜷川知事のきも入りで誕生して毎年きれいに整備され、ゴリが放流されたり、鴨川の畔にサイクリング道路が出来たりしています。ところが堀川の方は湯水期の冬の間、流れる水もなく、川床をあらわにし、ゴミがあちこちに捨てられて、無惨な有様です。何故水がないかといえますと、京都市が、堀川の源流であった鴨川と堀川を昭和29年に切断してしまったからです。堀川の両側の地下には下水管が整い、梅雨時など、この下水管があふれるとその分だけ水が堀川に注ぐ仕かけになっており、雨の少ない冬は、水の流れない無用の川となっていました。戦時中の疎開で大中に拡げられた堀川通りも最近はその一部には、堀川を埋めてしまえという声さえ出ています。しかし堀川は、南区の東寺、中京区の神泉苑とともに平安時代の面影をのこす貴重な文化遺産で、堀川一条にかかった戻り橋付近には、大阪城の石垣を思わせる古い石組のこつており、京都市史編さん所の、林屋辰三郎前立命館大教授などは、堀川の埋立てに強く反対しています。京都の川の歴史を調べてみますと、平安期以前には京都市の北東から流れてきた高野川と、北西から流れてきた加茂川とが現在の堀川三条当りで合流し、加茂川として堀川通りを流れ、

南西の桂川に合流していました。そして平安京を造営する際に、ど真中を流れるこの加茂川が邪まになるので、洛外に当る東側へつけかえたのが、現在の鴨川で、川を地勢に抗して無理に東へ曲げたために、当時はよく川がはらんし、今でも、東へ曲げた西賀茂の当りに御土居が残っています。そして現在の堀川通りを流れていた加茂川の方は、運河にして、内裏を建築する資材を運搬したということで、これが堀川という川なのです。川の変遷は、そのまま京都の歴史を物語っていますが、中世には運河である堀川は、丹波地方の材木の集散地として栄え、この当りに多くの材木商人が住みつきました。当時は堀川でアユが釣れたと古い資料に出ています。近世になると、舟に変わる交通がおい／＼発達し、運河としての堀川はすたれて、友禅など染色業者が住みつき、更に現代になると、川の汚れがひどくて水洗いが出来ず、業者は高野川上流や桂川で水洗いをするようになり、堀川の方は水もないゴミ捨て場となった訳です。堀川に沿って川を下ると、西本願寺の前から、国鉄をくぐり、下京、南、伏見区へと流れて、少しづつ水をため、やがて名神高速道路、京都南インターチェンジ近くで、鴨川に合流しています。この合流点では、水はまさにコヒー色をして悪臭を放ち、山

のようなゴミが流れをさえぎる仕末です。機械文明の花型とも云うべき車が、ひっきりなしに行きかう高速道路と、ゴミにひどく汚ない川——、堀川の合流点は、まさに現代文明社会のゆがみを浮き彫りにしています。

森鷗外の小説でも有名な高瀬川といえ、京都の目抜き通り、河原町通りの東を流れるいかにも京都らしい情趣のある川です

が、これは、慶長年間に、貿易の豪商といわれた角倉了以が、私財を投じ、鴨川の水をひいて、今の二条から伏見まで造った運河で、大阪方面から米や、雜貨を運ぶ重要な交通の役割を果たしました。かつてはこの川をさかのぼる高瀬舟を、岸沿いにひく綱引きの、「ホイホイ」という声が何里も離れた遠くまでひびきわたったということですが、この高瀬川も、木尾町の車の流れをよくするため埋めてしまおうという声があります。また鴨川の東を流れる疎水も、京阪四条駅の付近は、ふたをして駐車場になっていますが、これを更に南へ拡げる工事が先月から始まっています。

ところで昨年11月末に、大阪梅田の地下街に川のある町というのが完成しました。長さ90メートルにわたって、巾3メートル足らずの人工の川が流れており、川の畔には、赤や黄の造花が美を競い、華やかな噴水が8個所に設けられ、連日、人々が、ものめずらしそうに、押しかけています。川といっても、水道の水120トン、電気ポンプ6台で循環させている訳です。果してこれが本当に川と云えるのでしょうか。

山の雨水を集め、日の光を一杯に浴びて、キラキラと光り輝き、時にはとびはね、時には曲りくねり、その懷ろに魚を育くみ、その面に小鳥を遊ばせ、母の懷ろにもぐりこむように海に注ぐのが川ではないでしょうか。

今や、現代の人間は、川をつぶして道にすることや、川を汚すことしか出来ない。そして陽の当たらない地下に、水道の水を流して、きれいな川だと驚き、川にうえた人が一日ざっと20万人も、この川の代用品を見物して帰るのです。

車だ、機械だ、工場だ、それが果して開発といえ、文明といえるのでしょうか。水のかれた川床、鴨川との合流点の汚いあの色と臭い、それを思い出すたびに、「高度経済成長」や「文明社会」という呼び名を、僕は絶望的な思いで口の中で自嘲的にくり返して見るのです。

新入会員になつて

大阪市 永堀のり子

自己紹介——大阪風に言えばオバハンと呼ばれる年令。今年中学三年に進級する息子が一人。主人はサラリーマン、暮しは中級すれすれ、家計のやりくりは何度も働きに出て居る。

満州育ちで終戦後始めて本土の土を踏んだのも束の間、両親は栄養失調で死んだ。親は無くても子は育つを地で行った混乱した戦後、弟と二人何年かは心の支えの無いまま生きた少女時代、でも今は楽しかった思い出ばかりが心に残る。現在団地に住んで居るが性格であろうか人となじみにくい、引込し案で取越苦労ばかり、そのくせこのままで一生過したく無い、何かやりたいて考える、けれども何をしていいか手につかないまま一日がすぎて行く、皆様の仲間入りしてこの本について行けるか心配、そんな取越苦労はやめよう、自分で考えた事や言いたい事を何でも書ける様な気がして来た、どうぞ皆さんよろしく。

「花の種をまきましよう」

宝塚市 高橋 紀子

今年はいつまでも寒く、春が待たれましたが、やつと種まきに程よい頃となりました。バザーでお求め下さった種をどうぞ土のふところに入れてやって下さい。

種はいづれも私宅で毎年とつたものをまきと繰り返して三代目位のたねです。

まず普通の土で充分育つと思いますが、出来れば、風船かづらなどは、よく肥えた土の方が大きい実になりますので、元肥えをやって下さい。

では簡単に一種類づつ書きますと、

「風船かづら」

○たねのまき時、四月～五月

十センチ間隔位に一粒づつ一センチ位の深さにまきます。毎朝水をやる事。

移植する場合は、本葉五枚位の時に移します。根付くまで、毎日水をやりますが、根付けば放つておいても大丈夫です。

つる性ですので支柱をたてるか、かな網や垣根にはわせるようにすると、どんぐり伸びて、七月頃小さな白い花が咲き、夏の終りから秋にかけて、直径三センチ位の風船のような実が鈴なりになります。

一年草なので枯れて来たら実の中に入っている種をとり又翌

年まきます。

鉢植えにも出来ますので、窓辺でも出来ますが、鉢の場合は鉢の下に深皿をおき、毎日その中に水を入れて下さい。

「コスモス」

○たねのまき時、四月～六月上旬

床まき直まきどちらでも出来ます。

定植する時は十五センチ～二十センチ位になった時に三十センチおき位に一本づつ植えます。

茅が出るまで毎日水をやることと定植した時もまめに水をやって下さい。

団地の公園などに種をまく場合は、梅雨期にまけば、そう水をやらなくとも茅が出ると思います。比較的荒地でも出来まし、しばらく種が毎年茅を出しますから、一度まいておけば毎年楽しめます。

花は早くまいて八月から十一月まで咲き続けます。肥料は油カスやお米のとき汁などやれば大きい美しい花が咲きます。

「月見草」

○たねのまき時、四月～五月

別名よいま草。夕方から夜の間に花が開きます。野山へ行くとき雑草の月見草がありますが、あれと同類ながらももう少し上品な花が咲きます。

もと強い草なので、公園やお庭のすみにでもバラ／＼とまいて下さい。茅が出て少し大きくなったら十五センチ間隔になる位に間引いて下さい。

夏から秋にかけて黄色い花が咲きますが二年目に咲く筈です

ので、今年は咲かないかもしれません。

ものの本によりますと、月見草は二年目に咲くと書いてあるのを最近見て、あれそうだったかなあと思い返してみましたが、毎年この頃はこぼれだねが自然に育っていますので、正直の所、二年前芽が出たのが咲いているのかどうかわからなくなっております。

どうもはつきりしませんが、もし今年咲かなかったら、来年をお楽しみにして下さいませ。

「童話」

てのこないおにんぎょう

出来島団地 杉本

てのこないおにんぎょうって、なんだろうとおもうでしょう。これは、ゆきぶかいいなかのおうちのおはなしなのです。

さびしいむらはずれのいつけんやに、ととったおじいさんと、おばあさんと、それから、おにんぎょうのような、かわい

いるみちゃん、すんでいました。
るみちゃんは、ここへくるまで、おとうさんとおかあさんと、
とおいちにすんでいました。

るみちゃんのおとうさんは、まちのこうばで、げんきにはた
らいていましたが、あるひのこと、おおけがをしました。その
きずがげんいんで、とうとうしんでしまいました。

おかあさんは、ちいさなるみちゃんをかかえて、はたらかね

ばなりません。

おかあさんはこまって、いなかのおばあさんにそうだんをし
ました。

るみちゃんが、しょうがつこうにあがるまで、「わしら
めんどうみよう」といって、るみちゃんはいなかでくらすよ
うになったのです。

おかあさんとわかれるとき、るみちゃんは、なきました。

いなかに来てからも、まいにちまいにちシクシクないてばか
りました。

おかあさんがいないおうちは、たいようがしずんだみたいだ
もの。

やさしいおじいさんと、おばあさんは、おろおろするばかり
しろいおひげをなぜなせしていたおじいさんは、ぼんとひざ
をたたいて、

「おお、そうだ、るみちゃんよ、いいものつくってあげよう
といて、なやにいて、ほそいまるたと、のこぎりを、も
つてきてゴシゴシ、おしごとをはじめましたよ。るみちゃんは、
なにができるのかな、そつとのぞきました。

おじいさんは、のみでいっしょうけんめいきをほっています。

「じっちゃん、それなんだ」と、ききました。

「ああ、これはな、にんぎょうだよ、ほらできた」

みると、まあいいあたまのおにんぎょう。

「じっちゃん、このおにんぎょう、おててがないよ」

そういつてるみちゃんは、またなきだしました。

「まあまあ、みておいで」

おじいさんは、そういつてるみちやんのあたまを、なぜなぜしてくださいました。

まあいいおかおに、め・はな・くちをかいだおじいさんは、「ほら、おべべもかいて、できあがり」。

るみちゃんは、できあがったおにんぎょうを、じつとみていましたが、

「じつちゃん、おつかあちゃんだ、おつかあちゃんだ」

そういつて、にこにこわらいました。

おじいさんとおばあさんは、

「よかった、よかった」と、てをたたいて、よろこびあいしました。

るみちゃんは、おかあさんに似たこけしをだいて、こんやもぐつすりと、ねむっています。

俳句三題

高木米子

池早春 ぼっかりと浮く 鴎

猫柳野は六甲の山つづき

庭余寒鳥の綿毛がひとところ

「詩」

星の宮殿

春野

董

月のない大空に

狩人が満月に矢をつがえ

小羊を追うのです。

天の川原をひととびに

小羊たちを追ってきた狩人が

しばらくやすんでいるあいだに

小羊たちは白鳥にたすけられて

美しい宮殿にやってきました

美しい宮殿には

美しいお姫様と女官達が

ここなら大丈夫 ここなら大丈夫

もう狩人も追いかけてこないでしょう

から

小羊たちはいつまでもいつまでも

安らかにねむりました

隨筆

夏の夜空

枚方市 重川 雄

一、
夏の日は、太陽の光がサン／＼と降るような明るい日中よりも、むしろ、夕方の涼風が起る時刻に私は、本当の夏を見出すのだ。

庭や、表道路に、サツと打水して、落着いた感じのものを自分で作り、それを眺めることほど楽しいものはない。それは実に昼の暑さを忘れさせるに充分なるものを持っている。

また、外に出ては、四辺りがポーと霞んでいるような中に、月見草などが、かすかな風に揺れ動いていたり、地の底で啼いているような虫の音が、草の根方から聞えて来たりすると、堪らなく気持が和む。

其の上、夕月など、寝呆けたような、また半分泣いているような顔を、東の空から現はしてもしたら、余計に夏の夜の風情は楽しいものとなる。そんなとき、大川の上を、姿も見せず、名も解らない、それでいて声丈けは、はっきりと夜空に残す鳥などのいるのも、また詩情をそるに充分である。

そうした鳥は、一体全体、何処から何処へ去っていくのか、全然見えなければ、同類がみな寝静まったところから、こうして餌を漁りに行くこの鳥は、弱い哀しい運命を背負はされていくものに相違ない。

人間にも、こうした人がないことはない。
私など、昼は都会にて活動し、夜の憩いは田舎に在りたいと、長い間、希望していた。と云うのは、夏の夜の風情が忘れ去れないからである。それが自分の生活形式に対する一つの理想像でもあった。

夜になってから働らきに出なければならぬような生活は、余り人間としては、また、家庭生活面から見ても、好ましいものではないと、常に考えていた。

夜空に飛ぶ鳥の声などをきくと、ついそう云うことが、考えに泛んで来る。

二、

春の宵と云えば、何かしら浮かれ気分が漂っているように感じたり、秋の夜には物寂しさを誘はれたり、冬の夜は、きびしい北風に閉じ込められてしまうが、夏の夜は、兎角、魔がひそんでいるような感じである。色、な読物の中でも、悪魔が跳梁するのは、夏の夜に多く、犯罪が行なはれるものも、この季節が一番多い。だから、夏の夜は、常にしばしば、悲劇と結びついている。とも、言えはすまいか。

明るい太陽の下では、どうしても行なえないような悪でも、夜には、それが敢行されてしまう。

だから、夏の夜には、魔がひそむように思う。気温が、人間の持つ動物性を刺戟し、知性を麻痺させてしまう不思議な力を発揮するからではなからうか。

悪業を計画するときには、他人の目が嫌なものに見える。楽しいときには、人々の目が、笑っているように見えたりするも

のだ。併し夜になると、闇がそれを一色に塗り潰してしまふので、人間はここで、怪し気な動物性を、露呈する場合が非常に多くなる。

どうも動物性のある奴は、暗くなるといけない。

魚など、昼間は同族相食む争いをしていても、夜になると、岩の陰、或は藻の中などで静かに休む。仮令それが眠っているのではなく休んでいるのだとしても。もともと魚の目は閉じないし、目を開いていて眠ると云うことが可能かどうかは別にして目が開いている限りでは神経は働らこうし、矢張り魚は眠らずに休んでいると云うことになるのか知れぬ。

夜は休むべきもの。しかも家庭に在りて憩うべきもの。と、私は思っている。

むかし、麻雀を夜通しやった。其の結果会社勤めが嫌になつて退職した。それ以前に玉突に溺れて自分で玉突屋を開業しようとした。二三人の悪友と連れ立って玉突台製造所を訪れたこともある。

「あなた達は今、何をしていますか―」と、其処の親父は云う。

「三人共、会社員です」

「商売の経験はありますか」

「ありませんが、三人共、百点以上突けますので、何とかやうて行けそうに思います」

親父は暫らく考え込んでいたが、

「お金はありますか―」と、ズバリ聞き込んで来た。

「三人共会社をやめて、其の退職金でやる予定です」

「玉突屋開業計画はやめておきなさい――」
と親父はきっぱりと云い切った。

私共三人よりも、親父の顔の方が真剣味に溢れている。

「商売だから、こちらは売りたいけれど、あなた方には気の毒で売れない。玉突屋は夜の商売であるから、あなた方は、会社ですんでから、遊びに行くのはよいけれど、自分でやるべきものではない。止めておきなさい――」

と、云うきびしい訓告を受けて、三人共、スゴく引き下った。

戦争と云うようなことは、全然考えたこともないし、兵役と云うきびしい訓練も、三人共受けたことはない。只平和な、時勢を、思う存分遊んで来たと云うに過ぎない。

麻雀に凝つて遂に会社はやめたけれど、玉突屋の親父に叱られた経験があるので、麻雀屋になることは止めた。

若さと云う意気達は強いもので、会社をやめて、後はどうするかなど、心配したことはない、かなりの退職金を貰っているのだ。小遣には不自由はない。早速友人を誘つて白浜へ向つた。そうしたことのよい悪いは、矢張り年齢を重ねた後でないと、解らないと云うのは、一つには時勢と環境の故もあつたように思はれる。きびしい時勢は、人間を賢明にするが、昭和元禄など云う現代では人間の生き方に考えさせられるものがあるように思う。

三、

マルサスはその人口論の中で、人間が多過ぎて来ると、自然淘汰をするために、戦争が起ると書いてある。戦争の苦難を経

験すると、生きるためには賢明にならなくてはいけないことを教えられるのも、此の時だ。が併し、日本では戦後と云う言葉が、どうやらボヤけて来た。それ程、戦争と云う苦悩の歲月から遠去かってしまったとも言える。同時に物質的、精神的両面に於いて、どうやら平和を勝ち得たかの日本が出来上ったように見える。武器を抛棄した日本では、色々な宿題を包蔵したま、でも、一応は平和な形を表現しているとは言えよう。

併し、平和な日が続くとなると、必然的に人口は増える。マルサスの理論を、文化国家日本では、今は其のま、受容れる訳には参らないが、算術級数でしか食物の増産は出来ないのに反し、人口は幾何級数に於いて増加すると云っている。これは少し、食糧が有り余っていると云う日本には当嵌らないようでもあるが、人口が増え続けて行く日本に、果たして何時まで、こうした有り余っていると云うような状態が続くことも、充分考えておくべきではなからうか。

咽喉元を過ぎると、多くの人々は熱さを忘れ去るものだと云うようなことは、最早や時代錯誤な言葉となつてしまったのかも知れない。

やがてまた、日本にも人間が自然淘汰さるべき時代も来ようが、其の時代えの用意に、今生きている者は虚榮的な氣持を押えねばならないのではないか。

今から二十余年前に大戦争が終結して、其の時に生き残つた人々は、其の大きな洗札を受けた、めに、相当賢明になつて生きて来た筈だが、それを受けない人達は、觀念上、或る意味に於いては温床に育つて来たと見てい、。

男か女か解らないような服装をしたり、長い髪の毛を伸ばしたりしてグラけている人間が角棒など振り廻しても、薩張り力が這入っているようには見えない。この場合の力とは、真理に對する追究力のことだが。

確固たる信念を持たずに、余り高い処に向つて挑戦すると、手近な、自分に与えられた本当の使命を失なつてしまつて、日が経つにしたがつては悔を残すようなことにならないとも限らない。

飯倉遅々たる牛歩生活でも、しっかりと大地を踏みしめて進むなら、永い人生には当然恵まれるべきものがある筈である。

むかし、空の星が余り綺麗なので一つ落して掴んでやろうとした男がいて、少しでも近づくに限るとし、竿竹を持つて屋根に上り、それを振り廻したのはよいが、足許が沁り、星の代りに自分が転落して命を失なつたと云うようなエピソードがあるのも、この類。

人は甘やかすべきではないし、甘やかしを受けるべきでもない。甘やかすと其の者を愚者にしてしまう。若い人を甘やかすのは大人であるとすれば、大人の責任は、却々に重いこととなるのを、充分悟らなくてはなるまい。

夏の夜空を眺め乍ら、暗がりやを飛ぶ鳥の声を聞き流したり、月見草の風に揺れる姿などを眺めて、ひそかに人生を楽しんでいる人があつたとしても、他に害毒を流すようなことをしなければ、この人の方が、どれだけ日本の平和に尽しているものであるか知れない。

笑い話の中の教訓

滋賀県 三 矢 久 子

×月×日 現実の生活の中から

ヒョッコリ夕方下宿先から帰省した長男を交えて家族五人で夕食をすまして、久しぶりに長女、長男、私と雑談をかわす。

この日新聞に「日本人は貯蓄の好きな国民である」と見出しに書かれてあったので、貯金のことに話が進展する。長男がニタリと笑いながら自分のカバンの中から一冊のウスイ雑誌をとり出した、そして私にその雑誌を差し出した。私は受取ってよんだが、まったくナンセンスな話である。或る男が食べるものも食わずに貯蓄して銀行に四百万円からの高額の貯蓄をしてあったが栄養失調で亡くなったとかいてある。

長男は笑ってこう云った「この男は死ぬ少し前にデンキコタツのスイッチまで切って死んだ。死んでから後まで電気代が心配だったのだろう」スイッチの切れたこたつの中でこの男は亡くなっていた。

長女も私もおかしくて大笑いした。しかし私はこの話の中からいろいろ／＼のことをおしえられる様に思えた。人間は何の為に働き、そしてお金をもうけて何のために使うのであろうか……；バランスのとれた人間でありたいと思っても、お金のトリコにされる男や、三億円で世間をさわがす男もいる。お金によってニュースが生れる世の中である。昭和の消費時代でもこん

な話が生れるのである。

×月×日

長女がいろいろ／＼の本を整理して本棚にキチンと並べてある。いつも読書しようと思えばいつでも出来るのである。読書して何か自分の心の糧になるようにと暇のある時はこの本棚の前に座るのである。

或る精神薄弱児教育に生涯をかけた〇〇先生の書かれた本を読んだことがある。A男は無口な子供であった。無口と云うより全く動物のように、言葉を発しないのである。言葉は知っているが、誰とも話をしないのである。勿論親とも、友だちとも、先生とも誰もA男と話をしたことがなかった。親は〇〇先生にA男の教育をたのみに来た。〇〇先生は気長にA男を指導することにした。あせつてはいけない。「泣かずんば泣くまで待とうホトトギス」この心がけで指導に打ちこんだ。一ヶ月たったがA男は全くシャベラなかった。そして顔の表情も、たのしさ、うれしさも表現しない。泣きもしない。食事もおいしいのか、まずいのかわからない。モク／＼と無表情で食べている。全く誰が見ても石の地藏さんである。しかし〇〇先生はこの石の地藏さんと取り組んだ。〇〇先生は必ずこの地藏さんとお話の出来る日を夢みて一生果敢指導に熱を入れた。そして〇〇先生はこのA男が必ず口を開く日があると信じていた。あにはからんや、〇〇先生の気長の教育熱にこの石の地藏さんは顔の表情を動かしておはなしをすることが出来るようになった。或る日、A男はモザ／＼と落付かない様子なので〇〇先生はすぐA男に「便所に行きたいのだろうか？」と声をかけた。A男はウン

と言った顔付をして首をタテにふった。そこで〇〇先生はA男を連れて便所に行った。そしてA男が便所から出る時に「ボン」と大きな音がした。それはおならの音であった。先生はおかしかったので笑った。そしてA男の頭をなでながら「大きな音だったナァ よかった／＼大きいのが出て良かったナァ」と言った。A男も顔の表情をくずしてニヤリと笑った。その日からA男の顔の表情が少しづつ返事をするようになった。数ヶ月後には先生とも、友だちとも少しづつ話が出来るようになった。精神薄弱児童の指導は、根気と忍耐と努力の毎日であると思った。

〇〇先生の指導の熱心さには頭の下るようなおもいがする。この外にまだ／＼数多くの先生の教訓を得る話があり、いろいろと学ぶところがあり感動する本であった。

編集後記

〇 75・76号と続きました家庭についてのアンケート、如何でしたか。十日市啓志さんが早速読後感をお寄せ下さいましたが、もつとたくさんの方から読後感がよせられる事を期待して居ります。あのアンケートがあなたの家庭観に与えた影響、こんな考えの人もいるのかと新鮮な驚き、その他色々あると思います。一こと二ことでも結構です。

〇 亀山利子さんのぬかみそ教室「教科書のなかみがかわっている」が前号で終わりました。一年も書き続けられた亀山さんの努力に対しても、このまゝで終わらせるのはおいしい問題ですので、これからの教科書の問題をひきつづき「わいふ」で折

にふれとりあげてゆきたいものと思っております。まず手はじめに「私のうけた教育（主に歴史）」というのは如何でしょうか。体験に即したものであれば、比較的書き易いのではないでしようか。

わいふの中には戦時中の教育を受けられた方もありますし、戦後教育を受けて育った方、様々と思います。そういった時代による教育差など現われてくれば面白いのではないかと思われます。

〇 「わいふには共働きの家庭も多いし、アンケートによれば、今後機会があれば働きたいという人もかなりいる。そこで、家事の合理化をいかにすゝめていくかというそれぞれの体験を書き合えば……」という提案が矢崎好子さんからありました。オシメとフキンを一緒に洗濯機で洗うとかいう本を書いて一躍有名になった人もいる位です。色々な面白いチエを働かせて居られる方、一度皆さんに披露して下さい。

〇 その他、子供に対する性教育をいかにすれば良いかという問題をテーマにとりあげてほしいという希望が大阪の谷尾節子さんから出されて居ります。こういう問題をとりあげてほしいと考えて居られる方も他にたくさん居られると思います。そんな事がありましたら、わいふ誌上に一言でも投稿して、意見交換のきっかけを作って下さればと思います。

〇 今月は原稿の集りが悪く、前に投稿された分を載せたりしました。季節的に合わないものもありますがあしからず。わいふの原稿用紙を残りに印刷しましたので、御使用下さい。

〇 今月は印刷の都合で発行が大変遅れましたことを深くおわびいたします。

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒531 大阪市淀区中津本通1の2

世界長ビル内 三宝社気付

わいふ編集部

振替口座番号 神戸19515

発行人 高木由利子

印刷所 三宝社

発行所 わいふ発行所

〒665 宝塚市仁川団地3-10-205

誌代 一部百円

原稿〆切 毎月二十五日(以降翌月まわし)